



1. 相談からコーディネート

- ♪ 青木島小学校
- ♪ 長野日本大学高等学校演劇部
- ♪ 裾花小学校
- ♪ 緑が丘小学校
- ♪ 古里小学校
- ♪ 通明小学校
- ♪ 昭和小学校
- ♪ 朝陽小学校
- ♪ 長野養護学校朝陽教室
- ♪ 長野市企業人権同和教育推進協議会

2. 福祉教育研究会

- ♪ 第1回
- ♪ 第2回
- ♪ 第3回 事例：清泉女学院高等学校
日本大学学園長野小学校
保科小学校
- ♪ 第4回 「当事者体験ってホントのどこどうなの？」
基調講演：堀越喜晴さん

3. 福祉教育のつどい

「福祉教育楽しくなくっちゃウソでしょ！
どきどき体験 わくわく発見」



青木島小学校

どんな活動？

学校全体での人権講演会 ゲームとおはなし

協力してくれた人

飯綱高原ネイチャーセンター
ひむちゃんこと氷室秀樹さん

先生の想い

近頃の子ども達は友達づきあいが下手だと感じる。言い方一つでお互い気持ちよくつきあえるのに、それができずに傷つけてしまう。決まった友達としかつきあえない子ども達も多い。

いろんな子がいて楽しい、一緒にうれしい、そんなことを感じてほしい。



学年も性別もランダムにチームわけ。ムカデ競争してみる。息をあわせないと難しいよ！
チカラをあわせるってむずかしいけど楽しい。

最後はひむちゃんからの5つのメッセージ。「こどもは間違いがゆるされます」「自分のことも仲間のこともいいところから考えよう」「伝える。みんながわかる。アイデアを出し、賛成したり反省したりして決める」など。おとなにも通用しそう。



長野日本大学高等学校 演劇部



どんな活動？

お芝居の脚本に登場する障がい者の気持ちを、よりリアルに知りたい。実際に障がいのある人の気持ちを直接聞き、せりふや演技にも活かしていく。

協力してくれた人

長野市社会福祉協議会 塩野仁子さん (身体障がい者)
酒井由美さん

お茶を飲みながらお話を聞きます。生徒は聞きたいことがたくさんあって次々に質問が出ました。

塩野さんは双子で、姉妹は健常者と障がい者として暮らしてきました。塩野さん自身が抱いていたコンプレックスなども生徒たちはとても関心を寄せていました。

年代の近い塩野さんと酒井さんならではの話しやすい雰囲気



裾花小学校

どんな活動？

4年生の授業で、視覚障がい者との交流

協力してくれた人

長野市障害者福祉センター 松本友香さん

先生の想い

国語の授業で点字の学習をする。参観日に点字を打ってみたり、まちの中の点字表示や点字ブロックを調べたりした。その学習をもっと深めるため、当事者の方からお話をうかがい、視覚障がいの方が働く様子や生活、生き方にふれてもらいたい。



松本さんの携帯電話に興味津々。みんなが打った点字を松本さんが読んでくれました。ドキドキだけどうれしい瞬間です。



目隠して、音の出るサッカーボールで、松本さんも一緒に遊びました。

緑が丘小学校

どんな活動？

仲良し週間。5年生の車いす体験と身体障がいの方のお話を聞く。4年生の視覚障がいの方のお話を聞く。

協力してくれた人

ソワン南侯 飯沼大志朗さん
 身体障がい者 仲條幸恵さん
 視覚障がい者 松本友香さん

ポイント

障がいのある方のお話を聞き、生活の様子を知る。その中で「障がい者＝大変」、障がい者は手助けする相手という単純なことではなく、その人たちのもつ力についても目を向けてもらいたい。



仲條さんは、身体がいで、電動車いすを使っています。お仕事もして、自立して暮らしています。生活の中で工夫していることを聞くと、障がいのある人との距離が近くなっていきます。学校から遠くないところにお住まいなので、まちで会うことがあるかもしれませんね。



少しの段差も、車いすは上れません。でも、みんなで力を合わせれば大丈夫。飯沼さんもお手伝いしてくれました。

古里小学校

どんな活動？

東北の災害支援。現地へ行ったボランティアさんのお話。じゅず玉を栽培・収穫して、それを参観日に保護者と一緒にブレスレットにし、お寺で復興祈願してもらい被災地の仮設住宅で暮らしている皆さんにメッセージと共に贈る。

協力してくれた人

長野市災害ボランティア委員会 村田憲明さん
 じゅず玉プロジェクト
 信叟寺
 大槌町災害ボランティアセンター
 サポートセンター 和野っこハウス（大槌町）
 清泉女学院大学地域連携センター

先生の想い

もともと災害支援を学校全体でやっていたこともあり、子ども達の中で気持ちができていた。これを継続して、顔の見える人たちとの関係を創りながら楽しくやっていけたら。クラス単位で総合学習の中でいねいにやっていきたい。



子ども達からのメッセージが入り、かわいくパッケージされたじゅず玉ブレスレット。信叟寺住職がご祈願してくださいました

大槌町災害ボランティアセンターの菊池さんにじゅず玉を手渡す子ども（清泉女学院大学の災害ボランティア報告会にて）



ブレスレットを受け取った和野っこハウスのみなさん（大槌町災害ボランティアセンターより）



通明小学校

どんな活動？

学年ごとの人権教育の時間

協力してくれた人

長野市災害ボランティア委員会 田中優美子さん・倉石孝子さん
NPO法人信州アウトドアプロジェクト 吉田理人さん
視覚障がい者 押味洋子さん

先生の想い

◆ 6年生

昨年の6年生も災害の話聞き、被災地に心を寄せることができた。今年は、ぜひ話を聞くだけでなく子ども達の活動に結び付けたい。

◆ 1・2年生

友達づきあいがいうまくできない子どもが多い。数人のリーダー的な子が中心になり、一人一人の気持ちが表に表れてこない。関わりあう場面が必要だと思う。

◆ 3年生

地域の視覚障がいの方の生活の様子を聞き、助け合いの大切さについて学び、点字学習につなげたい。



6年生

みんな大槌町ってどこか知ってる？津波のニュースを見たときのこと思い出してみ、と倉石さん。



みんなで小物作りをして参観日に販売。売り上げを災害ボランティア委員会「はんどめいどプロジェクト」に寄付しました。



1・2年生

グループ作り、そのグループでの共同作業(みんなで輪っかをリレーしてます)。トラブルもあります。どう対処するのか大切なところです。

3年生

押味さんにたくさん質問する子ども達。「字はどうやって書きますか」「トイレはどうしていますか」「お菓子はどようやって作るの」



昭和小学校

どんな活動？

3年生～6年生までの人権の授業。参観日に合わせて、主に障がいのある人たちと交流。

3年生：ふれあいポン抜きゲーム

4年生：視覚障がいの方のお話と交流

5・6年生：聴覚障がいの方と支援者の方のお話

協力してくれた人

ふれあいポン抜きゲーム実行委員会
視覚障がい者 木暮恒男さん・小山正さん
松本友香さん・押味洋子さん
聴覚障がい者 窪田敬一さん
手話通訳 小宮修治さん

先生の想い

毎年参観日に合わせて人権の授業。参観日に合わせてやるので、保護者と子ども達が一緒に参加できることをしたい。4年生は、国語の授業で点字について学ぶので、いろいろな人に出会い、直接ふれあえるものになりたい。



ポン抜きゲームは、囲碁を応用したコミュニケーションゲームです。個人でもできますが、グループ対戦すると、よりみんなが仲良くなれます

押味さんを教室まで案内する4年生。しっかり手を握って…。ドキドキします。



窪田さんは身振り手振りで楽しくお話。小宮さんと窪田さんの手話での掛け合いもワクワクする楽しさです。最後は窪田さんに教えてもらった手話で拍手しました。



朝陽小学校

どんな活動？

4年生の福祉体験授業
車イス体験・アイマスク体験

協力してくれた人

フレンドシップ輪睦会(障がい者支援団体)
こまくさ(視覚障がい者ガイドヘルプ)
朝陽地区社会福祉協議会・朝陽地区福祉推進員・
民生児童委員のみなさん

先生の想い

自分たちの周囲のいろんな人と共に生きるをテーマに学習をすすめている。仲間の中にも障がいをもっている子ども達がいる。支えているつもりがいろいろなものをもらっていることもある。人の気持ちが障害になるのかも。人間得手不得手があつてあたりまえ、それを認め合った人間関係をつくってもらいたい。

地区社協の想い

心を学んでほしい。自分を大切にするように、周囲の人も大切にできる人になってほしい。朝陽地区のま

ちづくりを子ども達が考える機会にしてもらえたら。



← よいしょ。ちょっとした傾斜も車イスは大変だ〜。見守り役の福祉推進員さんがお手伝い。

「乗っている人の気持ちも考えないといけないなと思う」車イスは、足の

不自由な人にとっては自分の足と同じなんだとわかった(感想文より)。

車イスだと、ポストに手が届かないこともわかったよ。→



授業の前後

授業は2学期の点字の学習や人権講演会と連動させました。ボランティアグループのこまくさによるアイマスク体験や盲学校の木暮恒男先生のお話、車イスバスケの選手の方のおはなしなどなど二学期を通してたくさんのお話を学びました。

長野養護学校朝陽教室



どんな活動？

作業学習の授業の一環。高等部2・3年生が作業を通じてコミュニケーション能力を身につける。

協力してくれた人

老人福祉センター(安茂里・三陽・湯福・柳町)
長野市ボランティアセンター

先生の想い

就職が決まって働く際、作業はできるんだけど対人関係によって仕事を辞めてしまうという課題。学校内ではつけることが難しい対人関係力を校外学習で年代もさまざま、背景もさまざまな人たちが集まる場で作業を通して身につける。

その後の展開

関係者を学校の催しに招待したり、老人福祉センターの所長の一人からは、「一社会人として応援するからね!」とってもらいました。

県内の養護学校では初の取組みで、25年度以降も計画に盛り込まれました。

ボラセンでの作業
封筒作り(オリジナル)
イラストも自分たちで描きました。



グリーンカーテン作り・切手切り・ボラセン受付業務など、たくさんボランティアさんと一緒に作業しました。

事前打ち合わせ
所長・指導員が集まって養護学校の見学と現状説明を受け、子ども達の状況を知った上で受入れてもらいました。



長野市企業人権同和 教育推進協議会

どんな活動？

企業の人を対象とした人権研修会。毎年、同和問題、職場の人権、外国籍の人の人権、障害のある人の人権の三つの課題で研修が行なわれます(選択制)。その中の障がいのある人の講座をボランティアセンターと一緒に企画しています。

今年度は、担当の方の希望で「実際に障がい者施設を訪問し、障がいのある方たちとふれあうような研修会にしたい」ということで、若穂保科にあるアトリエCOCOにおじゃますることになりました。午前中は、施設長の綿貫好子さんからお話を聞き施設を見学。午後は、現場で働く障がいのある人と一緒に作業も体験してみました。

協力してくれた人

社会福祉法人廣望会 アトリエCOCO
施設長 綿貫好子さん・利用者みなさん

綿貫さんから施設の概要や目指していること、大切にしていること、地域とのかかわりについて聞きました。

施設開設当初は、なかなか理解されなかった障がい者のことも、地域との関係を大切にすることで次第に理解が深まったそうです。

一人の人間として夢をもつ利用者への愛情を熱く語る綿貫さんの話は、参加者の心に響きました。



クリーニング作業を見学。作業場は熱と大きな音。そんな中で手際よく作業している利用者の姿を見るのができました。

細かい作業。思わず、真剣な表情になります。

→

作業しながらのおしゃべりも楽しい！ 会話が花が咲きます。

↓



農作業を体験したグループ。利用者に教わりながらじゃがいもの袋詰め中。ちょうど雨が降って、蒸し暑い中での作業となりましたが、こちらも会話がはずみます。↓



そのほかの相談ケース

山王小学校 (視覚障がい者のお話とアイマスク体験)
三本柳小学校 (視覚障がい者のお話とアイマスク体験)
川中島小学校 (聴覚障がい者のお話・地域との交流)
湯谷小学校 (視覚障がい者の方のお話)
城東小学校 (点字体験)
豊栄小学校 (聴覚障がい者の方のお話)
綿内小学校 (地域学習・点字・アイマスク体験・お話)
松ヶ丘小学校 (点字体験)
南部小学校
城山小学校中間教室 (児童の居場所づくり)
信州大学附属小学校 (視覚障がい者のお話・点字体験)

広徳中学校 (福祉体験プログラム・ボランティア活動)
北部中学校 (人権講演会・アイマスク体験)
戸隠中学校 (アイマスク・点字体験と当事者のお話)
三陽中学校 (人権講演会・キャリア教育)
七二会中学校 (地域の高齢者との交流)
犀陵中学校 (不登校の生徒の社会参加)
櫻ヶ岡中学校 (総合学習)
俊英高等学校 (福祉コース生徒の車いす体験)
清泉女学院高等学校 1年生 (ボランティア活動)
豊野高等専門学校 (ボランティア学習と体験)
市立長野高校 (産業社会と人間授業ボランティア体験)
清泉女学院大学地域連携センター (災害支援活動)

など



福祉教育研究会



ねらい

学校の先生方はとにかく忙しい！でも、私たちとしては子ども達のため、地域福祉推進のため、より充実した福祉教育プログラムを！と思っております。いかに現場に負担にならない形で、学校と地域が一体となった福祉教育を展開できるのか…。そのため、学校関係者・ボランティア団体・ボランティアセンター運営委員と一緒に学びあう場をと企画しました。

第1回

5月21日(月)14:00～17:00

第1回は、福祉教育・ボランティア学習普及校連絡会議に合わせて開催しました。今年初めて福祉教育の担当になった先生方も多く、「福祉教育とは？」という問いかけから始めてみました。

最初に、長野県社会福祉協議会が作った「福祉教育実践ガイド」から、綿内小学校「地域探検(住民ディレクター)」と松代中学校の「ありがとう屋代線活動」の事例を紹介。



実践ガイド表紙

その後グループに分かれてワークショップで意見交換。今、学校には授業だけでなく、〇〇教育と名のつく学習が100以上もあると言われてます。それ以外にもクラス運営、部活動などさまざまなお仕事をされている先生方。日々追われているのは子ども達も同様のようです。そんな中限られた時間で何ができるのか悩んでいる様子がありました。



情報が無い！子どもが自ら考える活動にしたい！などなど。先生方、地域福祉ワーカーさん、スタッフ、みんなで意見を出し合いました。

第2回

6月11日(月)18:30～20:30

第1回の内容から、先生方の中にまだまだ疑問や不安がたくさんあることがわかりました。今回は、学校・地域・社協と一緒に「福祉教育」について考える会としました。

学校の先生からは、「地域とどうつながっていいのかわからない」「助けて欲しい時どこに頼めば？」という話が出る一方で、地域の方からは「障がいのある子ども達が学校でどんな様子なのか知りたいが、学校へ入っていきづらい」「福祉教育は出会い系。子ども達を地域へ出して欲しい」という言葉が。

どちらもつながりたいと思っていることがわかりました。それだけでも収穫なのかもしれません。



先生も、地域の方も、みなさん本音を出し合ってみました。実はお互いに助け合いたいと思っていたことがわかりました！

第3回

8月24日(金)18:30～20:30

前回の研究会で、実際の事例が知りたいとの声や、お互いの活動も知りたいとのご要望も。そこで、3回目の研究会は参加者が自分の活動を持ち寄って見せ合う場としました。

ここでの出会いも大切にしたいとアイスブレイクからにぎやかに始まりました。



出会いのイベントで盛り上がる

気持ちがあふれたところで、昨年からの充実した活動をされている学校の先生方の事例発表。語る方も聞く方も熱い時間となりました。

♪ 清泉女学院高等学校 2 年生 ♪

～いのちへのまなざしを深めるために～

竹村正之先生

7年間続けている夏休みを利用したのワークショップ、「いのちへのまなざしを深めるために」を紹介。机の上の勉強だけではない体験型の学習のプログラムとして、時間をかけてじっくり取り組まれている様子がわかります。「いのち」にかかわる仕事を目指す生徒さんたちだからこそ、少し重い問いをなげかけたりもします。特に、今年はダイレクトに「いのち」について生徒さんたちが意見交換できる場を作り、正直大人がびっくりするくらい正面から向き合う生徒さんの姿が見られたようです。

この取組みを通して、多くの方と出会うことも生徒さんの明日への糧になるとお話しがありました。



やさしく熱く語る竹村先生

♪ 日本大学学園長野小学校 2 年生 ♪

～きっかけは鹿の食害～ 清水きく江先生

生活科の授業で、地球温暖化という切り口から、自分たちが暮らす長野県で今大きな問題となっている鹿の食害について知り、地域・大学・研究機関など多様な人たちと連携しながら活動をしています。鹿に食べられてしまった霧が峰高原のニッコウキスゲの花畑を復活させるプロジェクトは、子ども達の「何かしたい」という気持ちから始まっています。

鹿の食害でスタートしていますが、それは、環境問題、食育、政策提言へと波及し、子どもたちの力に大人が動かされる場面も出ています。

また、鹿の駆除について子ども達同士が議論するなど意見が違う人たちとどう気持ちをあわせていくのかもその学習の中で学んでいる様子がありました。

最後に清水先生から「子ども達は、まだまだ障がいのある方や、高齢者の方から教えてもらいたいことがたくさんあります」という言葉があり、印象に残りました。



♪ 清水きく江先生

♪ 保科小学校 6 年生 ♪

～「ガイジ」という言葉から～ 篠原賢明先生

先生が5年生を担当していた4月に、子どもたちが生活の中で「ガイジ」という言葉を言うのを耳にしていました。よく聞いてみると、「障がい児」という意味でした。「おかついた時」「うざい」「その人なんかいなくてもいい」というような気持ちをこめて、友達に「ガイジ!」と言っていたようです。つまり、これが障がい者に対する子どもたちの認識でした。

そこで、困って悩んだ先生は、学校の地区内にある障害者施設アトリエCOCOを訪ねます。

目的は、障がいを持っている人たちが一生懸命働いているところを見ることでした。真夏の暑い日でした。子ども達は、暑い中一生懸命働くCOCOのみなさんと出会い、障がい者＝何もできない人という考えを変えていきます。

その後、アトリエCOCOの皆さんと保科小学校の絆プロジェクトがスタートしました。この言葉は、COCOの施設長の綿貫好子さんがつけてくれたものです。交流するうち、子ども達は自分たちで交流を企画するようになりまし



パワーポイントで写真を見ながらの発表

後半は、互いに自分の学校や団体の取り組みを持ち寄っての情報交換フリーマーケット。

お互いの活動や思いを交換し合う参加者。会議室は熱気で一杯



視覚障がい者も一緒に遊べるおもちゃに興味津々の先生たち



参加者からは「福祉教育といっても色々なやり方があるんだなあ」「学校が発信して人が変わっていく実践が良かったです」「福祉教育、

最後は人と人とのつながりなんだ」などの感想をいただきました。

当事者体験って ホントのとこどうなの？

ボランティアセンターには、2学期になると、小中学校から福祉体験の授業や人権教育・人権講演会の依頼が殺到します。

特に多いのは、小学校4年生。国語の単元で「目と心で読む」という点字を扱った授業があるからで、そこに合わせて点字の体験やアイマスク体験をしたいというものです。また、人権教育などで車イス体験をしたいという相談もあります。

でも、今の学校は本当に多忙で、先生一人でそれを考えるのは難しいのが現状のようです。ボランティアセンターでは、できるだけ先生に負担をかけずにできるよう配慮しながら、一緒にプログラムを考え、必要な資源（施設・ボランティアグループ・当事者など）をコーディネートします。

そんな中、私たち自身も考えさせられるのは、当事者体験です。私たちが感じる不便さや怖さと、当事者が思っている不便さや怖さは同じなのか？ という疑問です。一度も体験しないよりは、一度でも体験した方が良いのはわかるのですが、せっかく時間と労力（学校も講師も）をかけて実施しても、それがどう役立つのか？ その疑問を先生方、当事者のみなさんと一緒に考えてみたい。そんな狙いで少し乱暴なタイトルをつけて、研究会を企画をしました。

♪ 基調講演 ♪

「福祉教育」、「人権教育」、「体験教育」
を体験して考えたこと
堀越喜晴さん

視覚障がいの当事者であり、大学で教壇に立っておられる堀越喜晴さんにご自身の体験を交えてお話していただきました。堀越さんの著書「バリアオーバーコミュニケーション」と同じく、痛快で楽しいお話でした。



堀越さんの話を聞き入る参加者のみなさん

障がい者と健常者の間には、あらかじめ決められたステレオタイプなイメージが固定化していて、交流とか体験などの授業もそこがスタートなので、どうしても間違ったイメージを助長してしまう。

たとえば、視覚障がい者の場合も、「見えないんだから何もできない」とか、「見えないのにあんな風にできてすごい！」とか、そういったイメージがもたれがち。

だから、障がい者が不自由な中でも前向きに一生懸命生きている姿を見せれば、子ども達は優しくなり、いじめもなくなるというような万能な存在、「魔法のランプ」のように先生方は思っているのではないか。また、障がい者と健常者の間には固定化された役割があり、「してあげる人」に対して「してもらう人」「障がい者だからしかたがない」などと思われがち。

障がい者の側は、支援されて当たり前だという言動や過剰な被差別意識に始まり、最後は「あなたには私の痛みはわからない」という切り札でコミュニケーションを遮断してしまうことがあります。

堀越さんは、学校などで講演する時、子ども達に自由にどんどん質問させます。「どんなことを聞いてもいいよ」と。

最後には、福祉とか人権を考えた時、全てはコミュニケーションで、みんなで共に一つの物語を紡いでいく営みなのです。他者と自分の間の違いを認識し、異質な他者の物語を受け入れるしなやかさを保ち、バリア（障壁）をなくす＝バリアフリーという考え方から、コミュニケーションによって越えるバリアオーバー、その先はバリアから解放されるフリーバリアへと行き着くことです。と提起されました

♪ みんなでトーク！ ♪

ファシリテーター 内山二郎さん

参加者全員が3つの質問について、ポストイットに自分の考えを書き、準備された模造紙に貼っていきます。その中から内山さんがみなさんの思いや心の動きをひろっていきます。

質問その①「障がい者・高齢者ってどんな人？」

質問その②「体験学習でうまくいったこと、反省・課題」

質問その③「福祉教育で学んでほしいことは？」

内山さんの本音で語り合える雰囲気作りと、アイスブレイクの効果か、参加者からは堀越さんの話を聞いて気づいたことも含めて意見や感想が出されました。



堀越さんも一緒にトーク

色々な意見が出て、それぞれに考えがあり、互いの気持ちや考えを知ることによって新たに気づくこともあります



「障がいのある人とどうかかわったらいいのかわからない」「頑固」「難しい」「福祉教育という言葉そのものが胡散臭い」など、本音も出てきました。

そこへ、堀越さんもコメントを挟みます。「障がい者のイメージで難しいとか、頑固とか、わからないとありますが、堀越自身、障がいがなくとも頑固かもしれないんです」という発言に、一同なるほど！ となる場面も。また、「所詮自分では、本当に見えないことは体験できないからわからない」というコメントにも「これはすばらしいです。誰だって自分以外の誰の体験もできないんですよ」と返します。だからこそ、バリアオーバーのためのコミュニケーションが必要だということが理解できたのではないのでしょうか。



議論が白熱する中、身体障がいの当事者であり、市内の学校でも講演をしてくださっている川崎昭仁さんから、「難しく考えたら楽しくない。車いすで遊んだって良いんですよ。それが楽しかったらいつか『ああ、あの頃川崎ってという障がいのおじさんとあそんだなあ～、こうだったなあ～、楽しかったなあ～』って思い出してもらえたらそれで良いと思う」との発言。

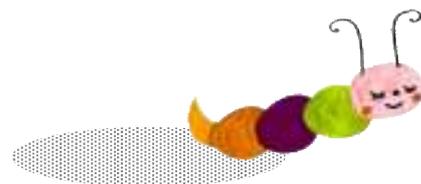
これは、企画した私たちも、まさに目からウロコでした。いろいろな人の考えを聞き、議論する場の大切さを痛感した一幕でした。

♪福祉教育のつどいへGO!♪

実は、本報告書のタイトルであり、福祉教育のつどいのタイトル「福祉教育 楽しくなくっちゃウソでしょ!?! ときどき体験 わくわく発見」は、前述の川崎さんの発言からヒントを得たものです。

どこかで、ボランティアセンターのコーディネーターも「眉間にしわを寄せて、難しく考える福祉教育をやっていたかもしれない」という自戒の念もあります。これからは、当事者発の福祉教育を考えていく必要があると思えました。

年が明け、2月2日に福祉教育のつどいが盛大に開催されることになりましたが、お話はそこにつづく…。



「福祉教育 楽しくなくっちゃウソでしょ?! どきどき体験わくわく発見」

第1部 シンポジウム

長野市立櫻ヶ岡中学校の事例発表

「私にとっての ふるさとサクラを見つけよう」 ～地域の人と、新しい自分に出会う～

小松保裕先生

地域と関わりながら

自立への道を進んでいく中学生

長野市立櫻ヶ岡中学校では、「地域を足場に自立していく生徒を育む総合的な学習」を2年生から3年生にかけて行ってきました。

めざすこと

- ①地域に学習素材を見つけ、地域とのかかわりの中で学習を深めていく
- ②地域の中から見出した課題を基に、視野を社会全体や世界に広げていく
- ③社会や世界にある問題から課題を見出し、地域に戻って学習をすすめていく

2年生では、地域の方々に協力して頂いて「働って何？」ということを考える職場体験学習などを行ってきました。その中でも、働くためには「自分の考えをはっきり持って行動することが大事なんだ」と全員で確認しました。

その活動を通して、先生方は「生徒たちは地域にそれほど愛着を持っていないのではないか」と気づきました。中学校を卒業すると、ますます地域との関係が薄くなってしまいます。ここはかけがえのない「ふるさと」ということを意識し、自ら「地域を知りたい、地域のために何かしたい」と思っ

てほしい。
そんな先生方の願いから、3年生の総合学習では、「創ろう・造ろう 私にとってのふるさとサクラ～地域に発信！サクラOOプロジェクト」（OOには、テーマが入ります）がスタートしました。



発表の小松先生

地域へ飛び出せ！

■七瀬通り商店街（商店街活性化）から

§商店街の夏祭りにスタンプラリーを企画。広報も地域の南部小学校に直接連絡し場を設けてもらい宣伝をしました。結果100人近い人が集まりました。

§商店街のプロモーションビデオ作り など
<生徒からのコメント>

どうしたら小学生がたくさんきてくれるか考えるのが大変でしたが、当日はたくさんの小学生やお年寄りの方が来てくれて、皆さん笑顔でお礼を言ってくれたことが嬉しかったです。

■東口開発

§地域の方へのインタビュー・調査

§市都市計画課への提言

§花の苗を植える活動（地域環境チームと）など

<生徒からのコメント>

もしかして目立たないかもしれませんが、こうしてみんなで真剣に植えること自体が地域貢献なんだなって感じました。

■お年寄り・子ども

§子ども広場じゃんけんぼんや児童センターへの訪問活動

§宅老所でのボランティア

§地域のお年寄りの生活のお手伝いと交流

§三世代交流の場作り など

<生徒からのコメント>

私たちのグループは宅老所に行って実際にお話したりおやつを作ったりのお手伝いをしたりしました。最初思っていたよりも、話題がないというか、話しかけにくくて、お年寄りの方から話しかけてもらったりして、話せるようになってきて、良かった。

地域の高齢者から話を聞く。私たちにできることってなんだろう？を考えました



子どもたちが「とても楽しかったよ」とか、「また来てね」とか言ってくれて、とてもうれしかったです。この活動をやって、将来福祉やこどもに関する仕事をしたいと思うようになりました。

■しきしセツ（歴史・施設）

- § 放送局に直談判して、番組に出演して、他チームのイベント（夏祭り）を宣伝。
- § 南向塚古墳ニュース作成
- § 駅周辺施設を紹介するタウン誌作成。作成経費は地域の企業に広告を依頼、本当に広告料をもらう。
- § 信州大学「ゆうゆうフェスティバル」企画参加

■地域環境

- § 花の苗を植える活動（東口開発チームと一緒に）
 - § 校舎立替のため、校庭の桜の木が切られた。その桜の花びらを押し花にしてしおりを作り、七瀬商店街の夏祭りで販売。売上げで桜の苗木を購入し、学校に残す。また、その木を利用して学校目標を掘ったプレートを作成、後輩に残す。
- <小松先生のコメント>
学校が地域に果たす役割として、学校が地域の憩いの場になれるのではないかと気づいた。桜の木があって、花が咲く、地域の方にどんどん学校に来てもらいたい。

■特産品

- § オリジナルおやきづくり
 - § 八幡屋磯五郎の七味の宣伝。オリジナルの袋をデザイン、手作りで作成、お店で配布。
- <生徒からのコメント>
会社の中での費用のことなど、社会のむずかしさを知ることができました。
- <小松先生からのコメント>
社会の難しさも知りつつ、何とかその中ででき

生徒たちが考えた八幡屋磯五郎の七味のキャラクター、その名も「唐辛七味ノ介」。校内の報告会では、着ぐるみも登場したとか?!



ることを精いっぱいやって、袋のデザインを完成させることができたということで、自分で壁を乗り越えて活動を進めることができたかなあというように思います。

地域の人たちに助けてもらい、「気づく」、「つながる」、「ひろがる」!

気になることはあっても、最初は誰に話を聞けばいいのかさえわかりません。話し合っ、気になることはとにかくくなんでもやってみよう! 町に出ているいろいろなものを見て、話を聞くと、課題や宝物、次の活動の糸口が見えてきました。



活動した生徒たちも参加の質問にも堂々と応えます! 大人から

地域の環境問題や再開発問題に焦点をあてて調査活動をしたり、子どもやお年寄りの役にたてることはないかと考えたり、商店街の活性化を考えました。これは、たぶん櫻ヶ岡中学校の地域だけではなく、日本全国どこにもある問題です。そのことに気づき、大人も驚くような行動に出る生徒たち。

小学校を訪ねてイベントの宣伝をしたり、ホームページや手作りのタウン誌、手作りのプロモーションビデオやTVの情報番組で地域のアピールをした人もいます。小さな子どもたちからお年寄りまで、いろいろな人に出会い、地域や社会のことを教えてもらい、会えば挨拶をしてもらえるようになりました。人と話すときに、勇気を出して声をかけること、どうしたら伝わるのか工夫すること、他のグループと協力したら、もっと活動が広がることも学びました。中学生だからこそできる関わり方もあれば、大人の社会の現実にも触れることもありましたが、でも、生徒たちはその現実を彼らなりに受け止め動いていく力を発揮していきます。

地域の人たちは、中学生が地域のことを知り、役に立ちたいと思っていることに心動かされます。そして、子ども達にとっての「ふるさとサクラ」を一緒に作っていく存在として、地域づくりを意識をすることになります。先生方も子ども達が動き出すことをじっと待ち、必要な時に手を貸す、そして、子ども達の力に改めて気づくことも。学校という学習の場が、地域の中心となって地域を動かしていきました。

「福祉教育 楽しくなくっちゃウソでしょ?!」 どきどき体験わくわく発見

であい・ふれあい・まなびあい 大人も子どもも動けば変わる

シンポジウムでは、会場のみなさんや生徒さんも一緒に櫻ヶ岡中学校の取組みについて考えました。地域にとって子ども達の存在はとても大きく、その学びから大人が学んだり気づいたりする場面がたくさんあったこともわかりました。また、地域と学校がつながるために、ボランティアセンターはサポート役として関わられることも示唆されました。子ども達に出会いを演出することで、地域福祉を推進していくためにボランティアコーディネーター自身が学ぶことにもなります。

活動の中で、子ども達は自分の将来や地域での役割を見つけ、地域を担っていく存在としての自覚をもちました。そして、中学生と関わった地域の方からは、「であい・ふれあい・まなびあい、私たちもみなさんから力をいただいたと思います。高校生になっても続けて欲しい」という言葉が。それに答えるように生徒からも「高校生になっても続けたい」という言葉が。活動を自分のものにして櫻ヶ岡中学を巣立っていく姿が印象的でした。小松先生の言葉、「中学生はかすがい」「全ての活動はまちづくり(ふるさとづくり)につながっていて、それこそが福祉教育の原点なのでは？」がこの事例の大切な気づきを語っていたと思います。

コメンテーター堀内昭彦さんから

みんなが豊かに年を重ねていくというのが本来の福祉。「幸せにくらしたい。あなたも私も」というのがスタート。じゃあ、「幸せってどういうことなんだろう？」と考える。でも、よくわからないから「困る」。困っていると助けてくれる人が現れる、それが地域の方たち。地域のみなさんは、助けてくれると同時に人として大切なことをかかわりの中で教えてくれる。自ら行動をおこす力が出て



熱く語る堀内さん。発表から大切なキーワードを導きます
地域に目を向けると、困っている人がいたり、困りごとがあったりする。では、今度は自分たちがそれを解決する方向へ動き出す。

彼らは、誰かに言われたからやるのではなく、自分たちが感じて動くことを経験し、自信をつけたんですね。

子ども達の姿から、大人が何を学び、どうしていくかが大切です。みんなが豊かに暮らすため、この学びを地域に返して行く必要があります。



第2部 情報フリーマーケット & 模擬体験授業

情報フリーマーケット(活動報告お店出し)

今年度、学校や地域で行なわれた福祉教育の事例が持ち寄られ、フリーマーケット形式で情報交換をしました。実際の活動の写真を持ち込んだり、生徒がブースに立ち、対応した学校もありました。また、当事者体験や福祉体験のサポートをしているグループは、体験のツールを展示。特に学校の先生方は興味津々、その場でつながったところもあったようです。ここにも、出会いや発見がてんこ盛り、他の会議を抜け出して、この時間に駆けつけてくれた先生もいらっしゃいました。



→
視覚障がい者発レクリエーションこすすは注目の的。工夫されたおもちゃやゲームに興味津々の先生方

模擬体験授業

当事者体験・福祉体験の授業が多くの学校で行なわれるようになりました。一方で、車いす体験・アイマスク体験・高齢者疑似体験さえやっていたら福祉教育になるという考えが、社協にも学校や地域にもあり、本当にそれで良いのか？ 現場でコーディネートしていると疑問に感じることも多くあります。今、全国的に福祉教育のあり方は見直しを迫られています。子ども達にとっても、当事者にとっても、貴重な時間を使って体験授業をするなら、より楽しく、心に残り、互いに触れ合うことができる授業はできないか、福祉教育研究会でも考えてきました。第4回の福祉教育研究会

での川崎昭仁さんの言葉 (p. 11参照) から、今回のつどいでは、ときどき・わくわく心が動く体験授業を当事者や支援グループと一緒に企画、提案しました。

参加者レポート

♪「生まれてくるってどんな感じ？」

NPO法人 ながのこどもの城いきいきびろじえくと
田中春海さん

出産直後、お母さんのお腹の上を誕生したばかりの赤ちゃんがおっぱい探してにじりあがっていく。首の据わらない赤ちゃんがコップからミルクを飲む…、驚きの映像に初っ端から命のたくましさを感じる。早速2人一組になってコップに入れた水を飲ませ合っこ。赤ちゃん役は首がすわっていないので、首を支えてコップを傾けるとちゃんと飲めた！ 災害時でもコップがあればミルクを飲ませることができ、衛生的にも良いとのこと。赤ちゃんが苦しい思いをしないように、様子をしっかりと見ながらでないとうまくできない。

子宮に入る体験では、大きくて真っ暗な袋に赤ちゃん役の人が入る。回りの人は袋の上からさすったり、声をかけたり…。中に入った人に聞くと真っ暗なのに全然恐くなかったそう。それどころか「親に対して感謝の気持ちが生まれました」という感想だった。

また、紙に自分発のエコマップ (家系図) を書くワークでは○と線で先祖へと繋いでいくと、自分が存在するためにたくさんの方が居たことが実感できた。どれも命の大切さ、重さを感じる感動的な体験で、幸せな時間を過ごせた。



赤ちゃん役の人にコップでミルクを飲ませてみます。意外と難しい！



みんなで「はやく生まれておいで」と子宮の中にいる赤ちゃん？ に声をかける

♪車いすで遊ぼう！

NPO法人ヒューマンネットながの 川崎昭仁さん

自身も電動車イスを使用している川崎昭仁さんを講師にお迎えし、車イス体験を実施。学校の先生や中学生、ボランティアセンターの運営委員などが参加しました。

まずは車イスで鬼ごっこ。これは車イスの操作に慣れるためや車イスバスケットボールの準備運動でよくやるものだそうです。片側の壁に並んだ“子”たちが会場の真ん中で待ち構える“鬼”に捕まらずに反対側の壁に逃げ切れたらOK。捕まった子は次回から鬼になり、回を重ねるごとに鬼が増えていきます。もちろん、鬼も子も車イスに乗っています。

1回目はベテラン男性教師が鬼。10人を超える子を相手に一人も捕まえることができません。鬼も逃げる子も慣れない車イスの操作に悪戦苦闘。しかし、回を重ねるごとに一人二人と捕まえることができ、次第に鬼と子の人数は逆転。鬼同士で作戦会議を開き、子を囲い込み捕まえます。終わる頃には鬼も子もすっかり車イスの操作に慣れ、参加者一同もっとやりたいと声を揃えました。



中学生も一緒に遊べるよーいどん！
一斉に逃げ出します。さあ、つかまえられるかな？



大人たちはなにやら企んでいる様子。まるでいたずらっ子のようです。

体験した先生からは「学校の車イス体験では、車イスで遊ぶなと教えていた。逆転の発想で楽しく体験できた。学校でもやってみよう」との感想がありました。川崎さんも「車イスに乗っているから遊べないのではなく、車イスに乗っている子も一緒に遊べる。楽しみながら体験すれば」と話していました。

後半は、車イスに乗る人とアイマスクをして押す人がペアになり、車イスに乗っている人の指示を受けながら車いすを押し、並べたペットボトルを倒していく

「福祉教育 楽しくなくっちゃウソでしょ?! どきどき体験わくわく発見」

ゲームも行いました。時間が足りず、もっと遊びたい、そんな車イス体験でした。

い大きな喜びを実感しました。

♪体を使ってコミュニケーション

FCレインボー 中沢 医さん

ブラインドサッカーチーム「FCレインボー」の中沢医さんを講師に、遊びから考えるコミュニケーションを体験しました。「ブラインドサッカー」は、視覚障がい者と晴眼者が同じフィールドでプレーするユニバーサルスポーツ。視覚障がいの当事者でもある中沢さんは、チームプレーに欠かせないコミュニケーションをとおり、様々なかたちの「伝え方」を編み出しています。

まずは簡単な遊びからスタート。約20人の参加者が全員アイマスクを着け、手をつないで輪になります。中沢さんが1回笛を吹いたら「右」、2回吹いたら「左」に回るという、シンプルなゲーム。ところが、これがなかなかうまくいきません。他の人の動きが見えない中で、どちらに回るかとまどい、お隣とぶつかることもしばしば。そこで中沢さんからヒントです。「声に出して共有しましょう」と。言われてみれば簡単なこと。「右!」「左!」と声をかけ合うだけで、たちまち動きがピタリと揃って、くるくると輪が回ります。みんなが笑顔になってきました。

続いて、中沢さん得意のブラインドサッカーを少し体験。10mくらい離れたコーンをゴールに見立て、アイマスクを着けたプレーヤーがシュートします。ゴールではサポーター役が「ハイ!」「ハイ!」と声をかけ、ゴール位置へ誘導。周りの人も「もっと右」「そこでシュート!」など、自然と助けを出し始めます。シュートが決まると大歓声!



コーン目指してキック!



「見えない」なら、別の「伝える」方法を考える。そのコミュニケーションをとおり、みんなで助け合うことで、1人では得られな

♪ゲームで楽しくコミュニケーション

NPO法人信州アウトドアプロジェクト

吉田理史さん

吉田さんは、子どもたちが仲良くなる楽しいゲームを実践している方ですが、この日は「大人」のみなさんが挑戦しました。その一つを紹介します。

参加者全員がひとつの円になります。最初にテニスボールぐらいの大きさのカラーボールを1個ずつ5人が持ち、吉田さんの「せーの」の言葉と共に、ボールを誰かに投げます。このときに必要なのが、コミュニケーションの力。「あなたに投げるよ」と言うサインをどのように伝えるかです。ボールを持つ人がうまくサインを送ることで相手の人もキャッチができるのです。ボールの数を増やしながらゲームは進み、最終的にはメンバーの半分の人がボールを持って投げ合います。このときには、誰が誰に投げるのか、投げたボールが空中でぶつかったりと大変な騒ぎに。



どうすればうまく行くのかな? みんなで考えます。意見のぶつかり合いも大切。



成功させるために、みんなで考えることが必然的になっていきます。喧々囂々、熱くなってわれを忘れて

意見を交わす先生方に対して、周りでジーと聞いていた高校生がナイスアイデアを出す場面も。行き交うボールは、まるで人の心のように。伝え合うことの難しさや、大切さが垣間見えたのでした。

体験されたみなさん、「ゲームの中で自然といろんな人と関わることができた。やってみてわかることがたくさんあった。」「思ったよりも面白かった」「早速学校でやってみます」など、先生方自身も体験することのよさを実感されていました。

第3部 全体会

最後は、今日感じたこと、気づいたことを互いに発表し合い共有する作業です。大人も子どもも一緒に発表です。椅子を丸く並べ、お互いの顔が見えるようにしました。とてもたくさんの方が残ってくれたので会場いっぱいの輪ができました。



驚きや感動、日頃感じていることまで、それぞれが今日のことを振り返りながら発表しました。もちろん、最後まで残ってくれた中学生も！ 春から高校生になる彼らにとって、中学校生活のまとめとなったのではと思います。

★コメンテーター堀内さんからの総まとめ

「今日のキーワードは『勇気』」

今日みなさんは、いろいろな勇気を出しました。こうして、知らない人と隣に座る『勇気』、やったことがないことをする『勇気』、そこからたくさんのかたちを感じ取った『勇気』、みんなの前で自分の感じたことを話せた『勇気』。

ほくがボランティアセンターに来て楽しいのは、いろんな人に会えること。年代、障がいがある人とか…。

世界中には色んな人がいるのに、一生の間に出会わないのはもったいない！ 出会って知り合うとふとした時に「あの人は幸せだろうか」と思う。そのために動き出す『勇気』が生まれる。

そんなことをみなさんと感じあえたと思います。

大人も子どももドキドキワクワクの1日が終わりました。来年度の福祉教育はどんな相談と出会えるのか、どんな人たちと出会えるのか、ボランティアセンターもドキドキワクワクの1年になりそうです。研究会も開催します！ またお会いしましょう。

♪視覚障がいの方と、すいとんを作ろう！

上村美佐登さん、笹川文子さん（木曾町）

食事は毎日の生活の基本です。目が見えない人は、食事をどうしているんだろう？じゃあ、一緒に作ってみよう。今日の先生は、視覚障害をもつ料理の名人です。

先生が野菜を刻む手つきは、本当は見えているのではと思うくらい軽やか。むしろ参加した先生方や学生さんのほうが危なっかしい手つきです。「今日のにんじんは大きいね。縦4つに割って、薄く切って」。あっかなびっくり切り始めた中学生が、まな板の上を指さし「こんな感じで…」と言いかけたあと、「5ミリ位のいちょう切りでいいですか？」。言葉で具体的に伝えることが大事だと気づきました。

「いい香りがしてきたね。すいとんは4本の指でつまんでお鍋に入れてね」。音や香り、指の感触が目の代わり。ぽんぽんと鍋に投げ込むお団子は、大きさもそろっていて、おいしそう！

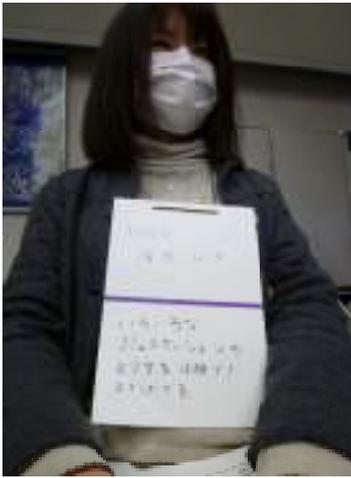
できあがったすいとん汁と、自家製の木曾の赤蕪漬けをいただきながらお話をしました。ご家族の食事をいつもこんなふうで作っていて、三味線や遠出が好きなお二人。「料理は手が覚えているの。できることは自分でやりながら暮らして、毎日幸せよ」。その言葉を味わう授業でした。



「久しぶりにお料理しました」という松本友香さん（視覚障がい）。



すいとんの生地は手の感触が覚えていきます。これくらいでいいかしら？」

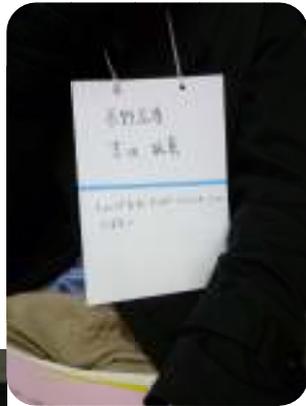


コミュニケーションって難しいけど楽しい!!

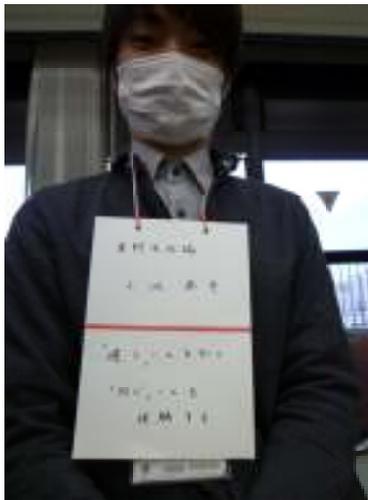


出会いを大切にしたい!!

自主性のもつ力



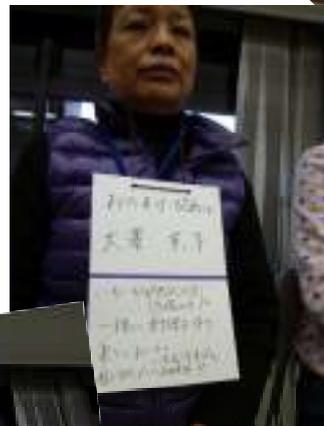
みんな楽しんでいて自分もとても楽しかった!!



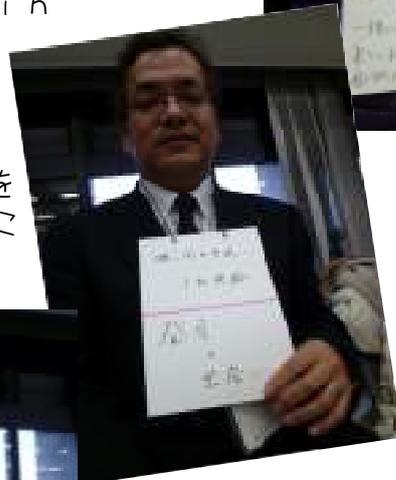
福祉って? 自分でもいろいろ考え体験した1日でした。

学校で何が出来るかな?

Win Win



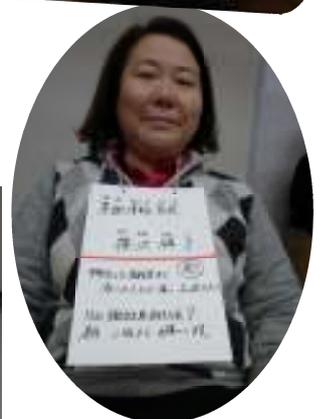
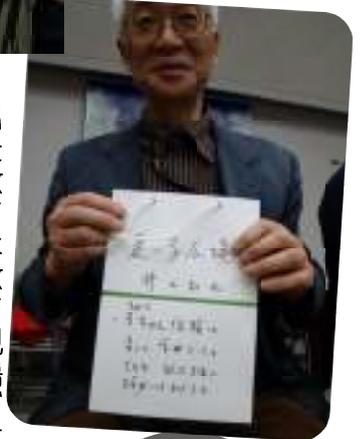
中学生の底力には感心しました。自由な発想でこれからも動いて下さい。知らない世界が沢山あった。



福祉教育は教育現場だけではありませんということをしっかり感じたシンポジウムです

「違う」ことを知り、「同じ」ことを理解する。

自分の中で、伝えることの難しさを学び、五感を使うと、面白く感じられるんだと思った。



楽しいからこそもっと知りたい!! もっと学びたい!! につながります。



地域に自分からとびこんでいけば、地域の方たちから助けてもらえるということを櫻中の生徒さんたちから教わりました! しゃべるだけがコミュニケーションじゃない。

